

# 防犯教育に関する共育プログラムの構築

## —異年齢集団活動による安全教育実践とその有効性—

八木 利津子

### <要旨>

本実践は、異年齢集団活動による安全学習が児童にもたらす影響を見出し、学校内外で起こりうる危機防止について児童が主体となって学ぶ活動可能な新たな学習方法の構築に向けた教材づくりとその有効性を検討する。方法は筆者が作成した視覚教材と解説資料を活用し、学習内容を1年生（被伝達抽出群 61 名）に伝達教示したサポート群と伝達を必要としない非サポート群の6年生を対象（計 48 名）に、安全学習意欲や理解等を自記式質問紙調査にて比較した。調査結果から【学習意欲】【説明の楽しさ】は非サポート群が高値となり、下級生への説明条件の有無と学習意欲の関係性は乏しいと判った。一方、【知識理解】【伝達困難感無し】等はサポート群が上回り、【安全学習の有用感】では、不審者対応や生活安全全般の多岐に渡る記述内容からサポート群の理解度の深さが示唆された。

キーワード：異年齢集団活動・学校安全・防犯教育・視覚教材

### 1. 緒言

痛まし過ぎる事件・事故に、日々子どもたちの健康と命を守る養護教諭らは言葉を失い、子どもたちの安全や安心の確保に、また新たな課題が突き付けられている。

2018 年に川崎市多摩区の路上でスクールバスを待っていた小学生らが包丁を持った男に襲われ、2 人が死亡し、17 人が重軽傷を負う事件が発生した。私立公立問わず徒歩通学より安全と考えられていたスクールバスの利用者が狙われたと本事件は衝撃が大きかった。いずれの学校においても、登下校中の防犯訓練や見守り活動による防犯対策は講じられ、様々な避難訓練のうち不審者対応に関わるシミュレーション訓練は取り入れられている。

しかし、スクールバスの乗降時に不審者対応などを想定して防犯訓練を行っている学校は、いったいどれくらいあるのだろうか。雨天時などを想定した交通安全の訓練はあるが、今回のような場面を想定した訓練は実施していない学

校が多いであろう。今後はバス待ちや乗降の仕方まで踏み込んだ防犯教育を考える必要がある。それだけに、極めて希少で特異な事件とは言え、対策を講じるのは簡単ではないが、加害者も被害者もつukらない防犯教育のあり方や見守り活動の見直しを検討していくことが喫緊の課題である。

事件が起こった当該学校や近隣の学校では、助長された模倣犯に対する警戒や対応に神経を研ぎ澄まし、見守り活動の範囲を拡充したり通学路の安全点検を入念にしたりと環境整備にも万全を期している。過去には下校中の女兒が殺害された事件を受けて、文部科学省は路線バスからスクールバスへ積極的な活用を打ち出していた。同省の調査（2008）<sup>1)</sup>によれば、全国の62.7%の自治体において、公立小学校児童及び中学校生徒の通学にスクールバスが導入されている。スクールバスを利用する学童期の割合は約16%（2015年調べ）であり、2005年度と比較すると倍増している。私立小学校ではそれが50%近くにも及ぶ。

このような状況下で、手をこまねく場合ではなく、多様な学習方法を導入したり、再発防止のために学校と地域の見守り活動ボランティア等が連動する危機体制を確認したりすることが求められる。

## 2. 研究の背景

地域の体感治安を向上するために、地域住民との連携のもと学校では、防犯に対応する個人技術のスキルの向上が必要となり、教育実践では多様な場面を想定して体験しておくことが有効であるとの報告<sup>2)</sup>がある。国策としては攻撃性や感情の高まりに敏感に反応し特殊な感知機能を有する防犯カメラの設置などハード面の整備も大事である。しかし、教員がすぐに対応できる更なるソフト面の充実も必要である。

内閣府政府広報室の調査「子どもの防犯に関する特別世論調査」（2006）<sup>3)</sup>によれば、「子どもの防犯のために効果的と思う地域や家庭の取り組み」（複数回答）として多い回答は51.5%であり、「防犯パトロールといった防犯活動を盛んにすること」を求めている。また46.2%の住民は、「ご近所との情報交換の場の必要性」を挙げている。さらに、42.5%の人は「子どもに防犯ブザーなどの防犯グッズを持たせること」を、ほぼ同率の41.2%が「近所で不審なことが起きていないを子どもと話し合うこと」を重視している。このような世論の意識

を反映し、全国的に子どもを犯罪から守る活動が盛んに行われてきたが、活動者の多くは高齢者で、近隣住民への声掛けや登下校時の見守り活動や通学路の防犯パトロール活動が中心となっている<sup>4)</sup>。しかし、大人が広く地域に目を行き届かせようとしても、そこには限界があり、昨今多発している事件のように、万一その隙に、不幸にして子どもが犯罪者に遭遇すれば、最終的には子ども自身が自分の身は自分で守らなければならない。子どもが犯罪被害に遭わないためには、子どもは無防備でいいはずはなく、被害に遭わないための意識を育てる防犯教育にさらに力を入れていく必要があると言えよう。

ここでは、子どもを犯罪から守るために実践している施策や事例を想定してとりあげる。例えば、子どもと大人が関わり合う地域社会の実現がその1つであり、地域の子どもの大人が相互に関わり合う地域社会を目指し、各地で挨拶や声かけ運動の取組を進めている<sup>5)</sup>。一方で子どもが犯罪被害に遭わないために、ボランティアが学校の安全教育に参画して交通安全に留意することに加えて、子どもたちに人を警戒することも教えている。こうした安全指導により、子どもたちは知らない人に挨拶をしてよいのか、警戒すべきなのか分からず、知らない大人に対する不信感を高め、地域社会の連携を阻害する可能性がでてくる。

また、子どもの見守り活動の問題について、都心部に位置する東京都における子どもの見守りに関するアンケート調査（2008）<sup>6)</sup>によれば、実際の見守り活動者の高齢化が進んでいる地域の割合が過半数を占めており、活動できる時間に限界があるとの回答が54.1%と多い点に着目したい。また、「特定の人への負担が大きい」が37.5%、「情報共有が進んでいない」「地域の学校との連携が難しい」「地域の他団体との連携が難しい」と答える団体は10%を超えている。

したがって、今後は、子どもを犯罪から守る活動の見直しが、益々重要になると考えられ、地域コミュニティが活発化し、地域ぐるみで子どもを守り育てていくためには、子どもたちを地域の大人から引き離すのではなく、地域住民と子どもと一緒に防犯について学び関わり合い、学校と地域社会の連携を強めていく取り組みを進める必要がある。

中迫・瀬渡の調査（2018）<sup>7)</sup>によれば、全国の小学校のうち「地域に開かれた学校」と連関するコミュニティスクール認定を受けた1,234校を対象にした

安全指導に関する調査から 350 票の回答が得られ、そのうち防犯学習の内容が実際の犯罪防止につながった事例は 40 件あった。40 件の回答は「逃げる・回避」「危険を周囲に知らせる」「大人への報告」の 3 つに集約されている。具体的には「その場から逃げた」が 13 件で、なかには「危険を察知したので道順を変えた」という事例もあった。「こども 110 番の家や近所の民家に駆け込んだ」の回答は 10 件で、その他「いかのおすし」の標語を実践したなどの事例もみられている。「危険を周囲に知らせる」については、大声を出したり、持っている笛を鳴らしたりしたという回答が 5 件あった「大人への報告」をした事例は、40 件中 21 件と半数以上の回答があり、防犯学習を実践したことによって、不審者に遭遇したことを親や学校、警察に速やかに伝えることができるようになったケースがみられている。この先行調査から、より望ましい防犯学習を進めていくために必要なものとして教員の約 4 割が「教材」と回答していたことは大変興味深い結果である。教育現場では手作りの紙芝居や副読本や DVD 作成など、様々な視覚化教材を活用しているものの、川崎市の事件のように想定外の犯行シーンなどを想定すると、教材内容の見直しや安全教育の形態の工夫や充実が求められる。すなわち、教育現場において登下校中の事件等は子どもにとって他人事ではなく、まさに自分事として考える喫緊の安全対策と言えよう。

そして、効果的な安全教育の在り方を探るとともに子どもが主体となって学ぶ防犯学習教材の開発と構築が期待されている。

### 3. 研究の目的

そこで、防犯等に関わる教育活動の観点から、学習指導要領（平成 29 年告示）の指導の重点に強調されている安全教育に注目した。本研究では効果的な安全教育の取組方法を探るとともに異年齢集団活動による安全学習が児童にもたらず影響について、その成果と課題を検討する。具体的には、小学生が主体となって学ぶ持続可能な安全教育の方法の構築に向けた視覚教材づくりとその有効性について検証する。

### 4. 研究の方法

安全に関する教育活動について筆者が作成した壁新聞である掲示教材（図 1、

図 2 参照) と解説資料「子どもの安全・安心確保のためにいま考えること」<sup>8)</sup>  
<sup>9)</sup>を活用し、防犯を含む学校安全のポイントをサポート対象の児童に提示する。  
 本教材は筆者が、学校内外のヒヤリハット体験を軽減する方策としてこれまで  
 調査した児童や地域ボランティアの意見に基づき作成したものである。学校外  
 の安全は通学路で留意する「合言葉」を盛り込み下級生に伝えやすい内容を検  
 討した。学校内の対応策は日常の学校生活においてけがが発生しやすい場所や  
 事象からクイズ形式にして常時確認可能な壁新聞を作成することであった。こ  
 の教材を活用し、上級生が下級生にサポートする異年齢集団活動による危機回  
 避力の育成を試行した。有効な安全教育の在り方を探る方法として、学習内容  
 の伝達を教示したサポート群と伝達を必要としない非サポート群の高学年児童  
 に対して学習意欲や安全学習の理解を比較して、異年齢集団活動による防犯教  
 育等の有用性について自記式質問紙調査を行い検証する。

質問項目は、【学校内外の安全に関する知識理解】、【安全教育（防犯等）の重  
 要性に関する意識】、【学習態度】、【下級生への伝達意欲】、【異年齢者との交流  
 の有無と伝達内容】、【伝達の楽しさ】、【伝達の困難感】、【安全学習の有用感】  
 の項目である。伝達内容と有用感は自由記述とし、他項目は 2 件法で回答を求  
 めた。【伝達の楽しさと困難感】については 5 件法を採用した。一か月後、被伝  
 達群として抽出した低学年児童に同項目の自記式質問調査を実施した。

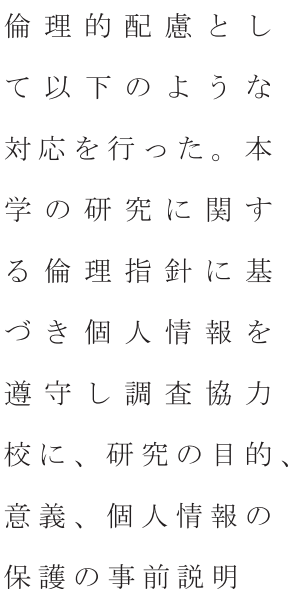
調査対象は都心部の市街地に位置する公立 A 小学校の児童 109 名であり、非  
 サポート群 6 年生 19 名(男児 7 名、女児 12 名)、サポート群 6 年生 29 名(男児

12 名、女児 17 名)、被伝達  
 抽出群 1 年生 61 名(男児 33  
 名、女児 28 名)であった。  
 安全教育の新たな手立ての  
 一つに上級生が下級生に伝  
 達する手段を模索する観点  
 から最高学年の 6 年生を選  
 定した。調査期間は 2019 年  
 8 月から 2020 年 9 月である。



図 1 学外の安全活動（防犯教育）の教材・壁新聞 2019（八木利津子作成・清永奈穂協力）





を行い情報の守秘

「い」と答えたのは「わかる」という回答だ」と答えており、これは大切だと思いま

後の 16 名 (86.4%)  
(%) の児童が学習意

答 1 名を除外し、  
えたが、実際に壁  
説明できなかった」  
れた伝達率に到達  
ほうがサポート群  
質的であったが、6

名(20.7%)が抵抗感を表し実際に壁新聞を学んだ後は21名(72.4%)が説明していなかった。内訳は男児の半数が説明を終え、女児は僅か2名の説明にとどまった。また、非サポート群は過去に下級生と話した経験がある児童が約7割おり「火遊び・きけんな遊び・けが・かぜになる原因」について話している背景が把握できた。サポート群は壁新聞の学習以前に、15名(51.7%)の児童が下級生に安全の話をした経験を有し、「登下校での交通安全」「全学年と不審者」「不審者はいつ出るかわからない」「1年生と交通ルールの話」「遊具の使い方」「廊下を走っていたから注意した」「廊下を走らない」「サッカーする場所と鬼ごっこやドッチボールのする場所が違うこと」など注意喚起はしており、調査後の伝達が期待できる。

【下級生に説明する楽しさ】は、非サポート群の回答無し1名を除き6名(33.3%)が「とても楽しかった」と述べ、4名(22.2%)が「楽しかった」と回答し「楽しくない」や「全く楽しくない」の回答はみられなかった。サポート群は、「とても楽しかった」が6名(20.0%)と「楽しかった」が6名(20.0%)で「楽しくなかった」と答えた児童が4名いたが、「全く楽しくなかった」と回答した児童は非サポート群同様にみられなかった。

【安全学習を伝える困難感】は、非サポート群は伝達した14名に〈どれくらい難しかったですか〉の問いに、3名(21.4%)が「とても難しかった」と答え全員女児であった。困難さについては、伝達することは「ふつう」という回答が14名中8名と最も多く、「難しくない」や「全く難しくない」は皆無であり、伝達が容易という感覚は抱いていないことがわかった。伝達したサポート群16名の困難感は、「とても難しかった」と1名が回答し、「難しかった」は男児2名、女児が4名の計37.5%であった。「難しくなかった」と答えたのは女児が1名(6.3%)で、「全く難しくなかった」と男児2名(12.5%)が回答し、伝達の困難感を感じなかった児童の割合はサポート群のほうが上回る結果であった。

【安全学習の有用感】に関する記述は、学校内の意見より学校外の意見のほうがいずれも上回っており、非サポート群よりサポート群のほうが多岐にわたる内容や拡がりが見られ、交通安全と不審者対応に関する記述がより具体的に述べられていた。以下の表1と表2に有用感に関する記述内容を示す。

表 1 安全学習の有用感に関する自由記述〈非サポート群〉

| カテゴリ | サブカテゴリ | 自由記述(基本データ)  |
|------|--------|--|
| 学校内  | 廊下の安全  | けがの防止を気をつけるためろう下は走らない<br>ろう下は走ったら、まがってくる人にぶつかるので気を付けた方がいい  |
| 学校外  | 不審者対応  | 登校中下校中に気をつけることのために、知っている人でもついていかないように気をつけたい  |
|      | 生活安全全般 | これからもきけんなことをしないよう気をつけたい<br>親に教えることができてよかった<br>友達に教えることがわかった<br>けがやきけんが起きない方法を知った<br>けがの手当てを知れたからおちついて対処したいと思った |

表 2 安全学習の有用感に関する自由記述〈サポート群〉

| カテゴリ | サブカテゴリ     | 自由記述(基本データ)  |
|------|------------|--|
| 学校内  | 廊下の安全      | まがりかどでぶつかりそうになった時があったけど、ろうかを走らなかつたらぶつからずにすんだ<br>これからは、ろうかでぶつかったりするのを気をつけて、下級生にも注意をどんどんしていきたい<br>曲がり角では、ゆっくり歩くようにしたい・廊下を走らなくなった<br>ろうかを走ったら人とぶつかるので走らないようにしたい<br>向側からとつぜん人が出てきて、歩いたからぶつからなかった   |
|      | 生活安全全般     | おはしもてを頭に入れといて、いざとなったとき役に立った。(ひなんくんれん)<br>学校のルールを守って、自分やまわりの人の身を守るために、安全を心がけたい  |
| 学校外  | 運動場の安全     | 遊具の使い方を学んで注意することができた   |
|      | 不審者対応      | みちでだれに声かけられても無視する<br>一人で公園でサッカーしていると黒い人が近づいて来たので逃げた。その時めっちゃこわかった<br>今まで1回だけ知らない人に声をかけられて車に乗って家まで送ってもらった事があったけど、今は、それは絶対にダメな事だと分かった。その時は、家に帰してもらったけど、もしかしたら、ゆうかいされるかもしれないので気をつけたい<br>ニュースでゆくえ不明のことがあってこわくなったので、下校中、一人になった時はチラチラ後ろをみることにしている。友達の家で遊んで帰る時は暗くなるので早く帰っている<br>学校外の防犯で、どのようなことにきをつけるのか知った |
|      | 交通安全       | これから信号がでんめつしたら、とまって青になった時だけわたる。車が通っている時に全然止まらないから手を上げたら車が止まってくれて手をあげるのが役に立った<br>こうつうルールははしってはいけない<br>左側、右側通行を知れたから、自転車に乗って走る時や歩く時に役立った<br>右がわ通行+歩きに気をつけたい  |
|      | インターネットの安全 | インターネット(ゲーム)は楽しいけど知らない人がやっていたりするのでそこは気をつけようと思う<br>けいたい使用の仕方など、けいたいメールとかネット上での注意の学習をした時にそういうことになるんだと知って気をつけながらも使っている(役にたちました)   |
|      | 生活安全全般     | 安全のためいま自分ができることとしててらしあわせてみる<br>安全に気をつけてくらしたい・ルールを守る・周りを気にすること<br>いつも安全に気をつけていきたいと思った<br>まず、日常のことを気をつけたいと思った<br>これからケガをしないように安全について考えながら遊んだりするのいいと思った。あぶないことをしている人がいたら注意したい<br>合い言葉で覚えると分かりやすくてよかった   |

記述内容(表1、表2参照)に着目すると、学校内に関しては両群とも廊下の安全面が最多であり、より身近な日常体験からの表出傾向と考えられる。学校外の安全では、非サポート群は登下校中の安全など場所を限定した意見が複数であったのに対して、サポート群は男女共に不審者対応について自分たちの行為に関する意見が目立っている。例えば「道でだれに声かけられても無視する。」「一人で公園でサッカーしていると人が近づいて来たので逃げた。その時めっちゃこわかった。」「下校中一人になった時はチラチラ後ろをみることにしている。友達の家で遊んで帰る時は暗くなるので早く帰っている。」など、これらの記述は過去に遭遇した危険体験を想起した意見や具体的に想定した場面で



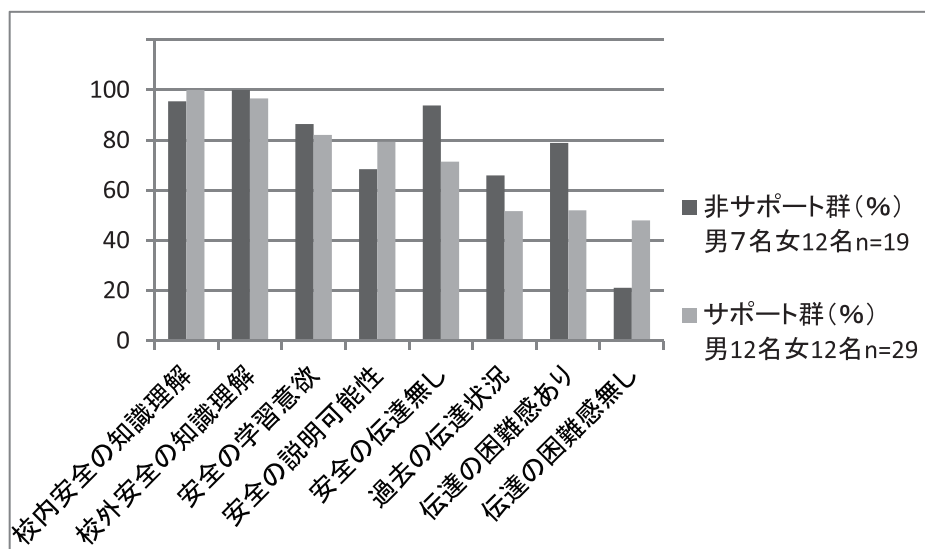
の防犯意識と言えよう。

学校外では、非サポート群は「親に教えることができてよかった。」「友達に教えることがわかった。」「けがや危険が起きない方法を知った。」と学んだ事項や感想が過半数を占めていた。それに対してサポート群は「これから信号が点滅したら止まって青になった時だけ渡る。車が通っている時に全然止まらないから手を上げたら車が止まってくれて手を挙げるのが役に立った。」「左側、右側通行を知れたから、自転車に乗って走る時や歩く時に役立った。」などの意見に代表されるように交通安全のルールや留意事項も再確認できている。

非サポート群とサポート群の質問項目の比較（図3参照）をみると、あらかじめ下級生への伝達を視野に入れて壁新聞を学習していたサポート群が上回った項目は、【校内安全の知識理解】と【安全の説明可能性】と【伝達の困難感無し】の3項目にとどまっている。【説明可能性】や【伝達の困難感無し】が高いのは、説明するよにという条件で学習をしているため必然であろう。そして、説明しようとする意識の中で、6年生が下級生への伝達場面を仮想した場合、日常的に目にふれる校内安全に関する知識理解を優先したことも理解できる。

また、非サポート群が【安全の伝達無し】はサポート群より22%多い結果についても、説明するという前提無く学習している条件相違の結果と言える。

しかし、図4では【安全の学習意欲】や【説明する楽しさ】は非サポート群



が高く、下級生への説明条件の有無が安全学習意欲と直結するかという観点から関係性が乏しいことが示唆された。

図3 非サポート群とサポート群の比較

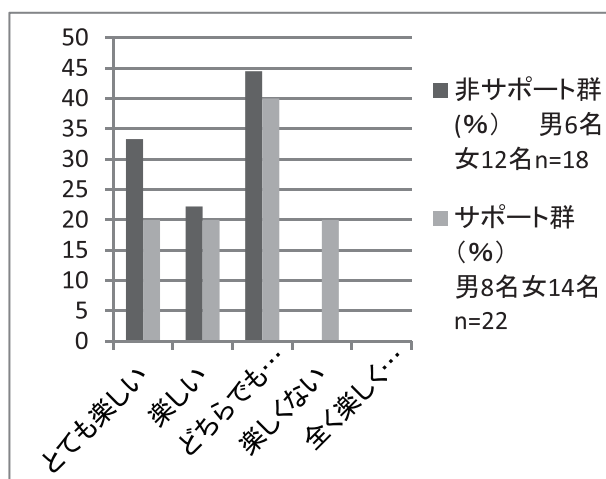


図4 「説明の楽しさ」内訳比較

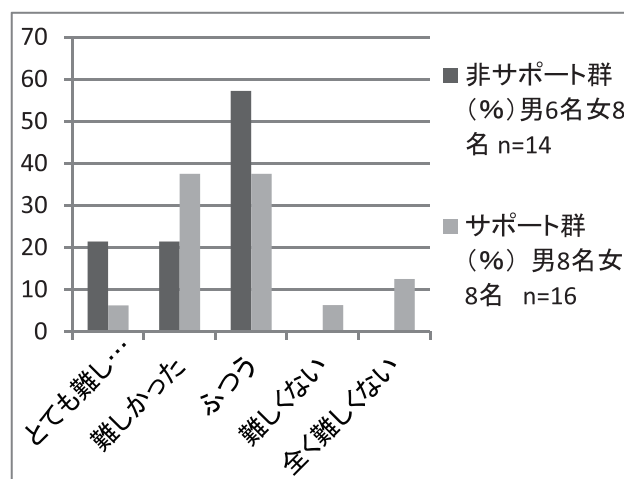


図5 「伝達の困難感」内訳比較

(なお、上記の図4と図5については無回答を除外している。)

## 5-2 被伝達抽出群の結果

【学校内の安全の知識理解】は、男児1名を除き、全員が「気をつけることはわかった」と回答し、【学校外の安全の知識理解】は、男児2名(3.3%)を除き「道路や公園の安全について気をつけることはわかった」と答えた。それに伴い、〈安全学習は大切だと思いますか〉の問いにも全員が大切さを認識しており、【安全に関する学習意欲】は、男児28名(84.8%)、女児25名(89.3%)が意欲を表わしていた。今回の【高学年からの説明】については、全体の半数以上が説明を受けたことがわかった。内訳は男児17名(51.5%)、女児14名(50.0%)が話を聞いている状況であった。

【過去に安全に関する高学年との対話】については、これまでにお話を聞いたことがあると回答した児童は30%台であり、男児10名(30.3%)、女児9名(32.1%)であった。お話ししたことがない児童は、男児23名(69.7%)、女児19名(67.9%)と男女共に7割を占めた。

【安全について高学年と話した内容】は多様で、身近な校内での安全に関する対話が圧倒的に多いことが把握できた。内訳は「ろうかでの注意」が13名(41.2%)、「はちみつじまんという標語の意味理解」が8名(26.5%)、「不審者についての対応」が4名(12.9%)、「かいだんでの注意」が2名(6.5%)で、他に「下校時のこと、外遊びについて、走ること全般、交通ルール、校内の注意全般の話」を1名ずつ記述していた。回答された意見を表3に示した。

表 3 安全について高学年と対話した内容（自由記述）〈被伝達抽出群〉

| カテゴリ       | 男児の意見   | 女児の意見  |
|------------|---|--|
| 廊下の注意      | ろうかでははしるとどんなきけんがあるか。<br>ろうかをはしたら人にぶつかったりころ<br>んでかがをするかもしれないちゅういは<br>わたりろうかですぐにいくをするのにおくれ<br>てわたりろうかをもうダッシュではしたこ<br>ろうかであわてるとすべってころぶ | ろうかのまがりかどではしりません。<br>ろうかのあんぜんをおしえてもらったべんき<br>ょうになりました。<br>ろうかではしたらこけたりつまずいたり<br>のけがになるからやめとってください。   |
| 階段の注意      | がっこうのかいだんのですりで上り下り<br>たりすすのはよくないっていうはなしを<br>してました。  | 記述無し   |
| はちみつじまんの理解 | はちみつじまんがたいせつとおもいます。   | はちみつじまんがよくわからなかったけど<br>はちみつじまんというのがしれてとても<br>よあつた。そして<br>もっところがあんぜんなきもちにな<br>った。<br>はちみつじまをおぼえること<br>ころんだりこけてけがしないためにク<br>イズとかは<br>ちみつじまんとかをこうく年のおに<br>いさんとお<br>ねいさんにおしえてもらった。 |
| 不審者対応      | 記述無し  | わるい人はいつもにこにこのかおは<br>なしやつた。<br>ほんとうはこわいのにやさしい人の<br>はなしをして<br>いました。<br>しらない人についてはいかないのが<br>わかりました  |

〈あんぜんのおはなしは、じぶんのいのちをまもるためになりましたか。〉の問いには、「とてもためになる」が男児 20 名(60.6%)、女児 20 名(71.4%)が最多数であった。「まあまあためになる」と示したのは男児 6 名(18.2%)、女児 3 名(10.7%)であった。「役にたたない」との記述は男児 2 名であった。【安全学習に対する困難感】は、男児 22 名(66.7%)、女児 21 名(75.0%)が示し、困難感を感じなかった 1 年生は男児 11 名(33.3%)、女児 7 名の(25.0%)と全体の 3 割近くに上った。【安全学習の有用性】は、学校内では廊下の安全について確認できた

表 4 伝達学習後の留意事項に関する記述〈被伝達抽出群〉 意見が頻出した。

| カテゴリ  | サブカテゴリ | 自由記述  |   |
|-------|--------|---|---|
| 学内外   | 場所等    | 男児の意見   | 女児の意見   |
| 学校内   | 廊下の安全  | ろうかではしらない。<br>チャイムがなったらろう下はしらない。チャイムがなったらろう下をあくる。<br>ろうかのあんぜんをおしえてくれたときがいちばんおぼえています。<br>ろうかをはしらないことをきをつけたいです。<br>わたりろうかをはしらないとおもった。 | ろうかをはしらずにあるいていこうとおもった。<br><br>いろいろなところにくときにろうかやそなどにきおつけたいとけがをすることかがわかったからこれからたいせつにしたいことがわかりました。<br><br>ろうかは、はしらないことや、みぎがわか、ひだりがわをあくるがしれてよかったです。<br>けがのクイズですなぜかとゆうともつとつよくおちたら大けがになるからです。   |
|       |        | はしらないこと<br>きょうしつのなかは、もうはしらない。<br>きょうしつとろうかとかいだんをらんぼうにつかつたらダメ<br>つくえでゆびをはさまないようにする。<br>うんどうじょうでひとをおさないのとこがきをつける                      | じぶんではしらないことをしりました。<br>きょうしつではしらないことをきをつける<br>きょうしつのものでおともだちのきづつけるのをこれからやめる<br>きょうしつをはしうないことをきをつけるとおもいました  |
|       | 運動場の安全 | うんどうじょうでこうしないうけいがないんだとわかった。   |   |
|       | 学校外    | 路上の安全   | あんぜんにかえろうとおもいます<br>こうつうをまもる。なにをまもるかという、わたるときにをあげる。  |
| 不審者対応 |        | いかのおすしをあやしい人にやることをがんばります。<br><br>はちみつじまんのおはなしをした。   | いかのおすしがたいせつなのがわかりました。<br><br>いかのおすしのことでいろいろこうゆうことは、あぶないとかがしれました。これからもきをつけてこうどうしたいです。<br><br>はちみつじまんのしらない人これからもしらない人にきよつけてじぶんのいもちをまもっていききたいです<br><br>わるい人はどこでもいるということがわかりました。<br><br>はちみつじまがきをつけたい。<br><br>これからじぶんのいのちをまもってじけんやけがのないようにきをつけて、みをまもるようになんげんがります。<br><br>ちゃんとまもってきをつける。 |

学校外においては不審者対応に係るはちみつじまんの合言葉の記述が多くみられ、「伝達学習後に留意しようと思った内容」を表 4 に示した。

## 6. 総合考察（課題と展望）

今回の実践研究はサンプル数が少ない点に課題は残るが、教材提示の効果が表れるサポート群の有用感に関する出現記述に比べて非サポート群は記述意見が僅少で内容也多岐にわたらず、学習後に深化しにくい傾向があるとわかった。サポート群の意見からは、校内外に関わらず「安全のため今自分ができることとしててらしあわせてみる。」「おはしもてを頭に入れといて、いざとなったとき役に立ちました。」「学校のルールを守って自分やまわりの人の身を守るために安全を心がけたい。」「まず日常のことを気をつけたらいい。」「これからケガをしないように安全について考えながら遊んだりするといい。あぶないことをしている人がいたら注意したい。」「いつも安全に気をつけていきたい。」「合言葉で覚えると分かりやすくてよかった。」など前向きな記述や安全意識が多数表現されている。さらに、廊下や交通の安全と不審者対応に加えて「携帯の使用の仕方などメールとかネットで危険なことになるんだと知って気をつけながら使っています。」など今日的課題への対応について具体的な記述傾向がみられた。

このサポート群の有用感に関する意見を反映し、被伝達群の1年生も廊下の安全や不審者対応に関する記述が頻出していた。また、“いかのおすし”や“はちみつじまん”の合言葉に随伴する伝達事項が1年生の意見に影響を及ぼしたと考えられ、このことは、壁新聞（掲示教材）の学びを活用した異年齢集団活動に依る学習成果である。

しかし、被伝達抽出群の1年生61名の意見から注目したい点は【安全に関する高学年との対話】についてである。「これまでに上級生とお話を聞いたことがある」と回答した児童は30%台にとどまり、話したことがない1年生は7割弱いることが示された。この安全に関して上級生と話したことが無いという結果を危惧する。

本研究を通じて、被伝達抽出群対象の調査はサポート群の自主学習1ヶ月後であるので、調査後の安全学習の浸透化に期待はできるものの、異年齢で学び合うピア・サポート体制を視野に入れた教育活動を学校内で計画し実行することが益々望まれる。その土台づくりのために、身近な危険防止を題材として視覚的教材を常に教示（提示）しておく簡便な方法に拠る学習環境の維持は一定

の効果を得られると判明した。それらの視覚教材を有効活用して教師の負担感をできるだけ減らし、自主的な学びが学校内で共有できる生活空間（学習環境）の確保と共育プログラムの提言や実践的研究を継続していく必要がある。

#### 〔謝辞〕

本研究にあたって、ご協力いただきました A 小学校の教職員や児童の皆様にここに深く感謝の意を表します。

#### 〔引用文献〕

- 1)文部科学省『国内におけるスクールバス活用状況等調査報告』, pp.2-62, 2008.
- 2)清永賢二（監修）・清永奈穂（他著）『犯罪からの子どもの安全を科学する』ミネルヴァ書房, 2012、「強い子ども」『保健の科学』, 58, 4, pp.249-256, 2016.
- 3)内閣府「子どもの防犯に関する特別世論調査」, 2006.  
(<https://survey.gov-online.go.jp/tokubetu/h18/h18-bouhan.html>)
- 4)黒宮亜希子著「地域における見守り活動の現状に関する一考察 ～岡山県 X 市 Y 地域, 民生児童委員・福祉委員らの自由回答データをもとに～」『吉備国際大学研究紀要（人文・社会科学系）』, 25, pp.93-102, 2015.
- 5)山内勇著「セーフコミュニティ活動による安心安全まちづくりー日本初の認証を受けた亀岡市の事例ー」『分権型社会を拓く自治体の試みと NPO の多様な挑戦』龍谷大学地域公共人材総合研究プログラム, pp.101-120, 2009.
- 6)子どもの防犯づくりのヒントとガイド「資料4子どもの見守り活動の問題」.  
(<http://hintguide.kodomo-anzen.org/siryou/toukeisiryou/toukei4/>)
- 7)中迫由実・瀬渡章子「小学校における防犯教育に対する取組みの実態について」『安全教育学研究』, 17, 2, 日本安全教育学会, pp.25-32, 2018.
- 8)八木利津子著「いま、防犯教育を問い直す ～安全・安心をめぐる課題の複雑化とセーフコミュニティ活動～」『心とからだの健康』, 23, 健学社, pp. 18-28, 2019.
- 9) 八木利津子著「いま、防犯教育を問い直すー子どもの安全・安心確保のためにいま考えること」『健康ふしぎ発見ニュース』 健学社, pp.2-7, 2019.